

きょうの発言

火の国フェスタ

の開幕を間近にして、会場となる熊本城周辺は急ピッチでお化粧直しが進んでいる。熊本城本丸は復旧工事のあと、以前に比べればやや白っぽく優雅になって全容を現した。熊本

の空にはやっぱり天守閣がよく似合う。石光真清の手記「城下の人」の中に、西南戦争で熊本城が全焼した時、住民が涙ながらに呆（ぼう）然として立ちつくむ印象深い場面があったが、今でも、お城はわれわれの生活に溶け込んでいるし熊本の誇り

だ。

また、江戸時代の武士の館である細川刑部邸が城内に移築されたそうだが、来月の一般公開が楽しみだ。全国各地にテーマパークは数多くあるが、本物は作ろうにも作れないのだから貴重な遺産といえる。

お城再建

昨春秋イタリアのミラノに行った時、街の中心部にあるドゥオモ（大聖堂）を見て感動した。幅九十一呎、奥行き百四十八呎、高さ五十六呎、外壁には三千百五十九体の彫刻と百三十五本の尖塔（せんとう）が連なる威容ぶりである。そして、一三八六

年にジャン・ガレアツォ・ビスコンティ公の命で着工し、完成までに四百五十年を要したという事実は、歴史のロマンを無言のうちに語りかけてくる。

私にも、熊本城を百年計画で昔どおりの姿に再建したいという夢がある。絵図面や写真をもとに、石や木、土という昔のままの材料を使用して櫓（やぐら）や塀を一年ごとに再建していく。一年ごとの工費は少なくても、年々完成する歴史的建造物は熊本に良き景観と変化を与え、観光資源として大いに期待できると思うからである。そして、お城はいつまでもわれわれの心の故郷であってほしい。

井 長（通産）
太郎 創（通産）
井 亀（通産）